

あつる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

縄文人は芸術家

今からおおよそ一万二千年前…。旧石器時代は、地球の温暖化により、新たな発展の時を迎えた。この温暖化によって、大陸と繋がっていた日本列島の北端が水没し、今の日本列島が誕生した。やがて、植物の分布が大きく変わる。北海道の西半分ほぼ全域と十勝平野には落葉広葉樹林が、北部・東部地域には常緑針葉樹林が進出した。この広がり、祖先の食生活を大きく変える。

そして縄文時代の幕が開いた。縄目模様の特徴の縄文土器。だが尖った底、抽象化された上部など、煮炊きに使うにはおおよそ適さないものであり、むしろ芸術品として極めて優れた造形美を有するものであった。縄文人はまさに芸術家と呼ぶに相応しい人々だった。

豊かな食生活

長い年月をかけて縄文時代はゆっくりと形成されていった。温暖化によってクリ・クルミなどの食料も豊かになって来た。温帯の広葉樹林を好むシカやオットセイ・トドなどの海獣類、そして魚類など、現在よりもずっと豊かな食生活。海・山などの自然がすべて彼らの食料庫だった。

実に多種多様なものを食物として利用し、特定の食物に頼らない生活。これは不作・不漁の影響を受けにくい、採りすぎないための生活の知恵だった。自然とのバランスを保ちながら、四季折々の旬を味わうグルメそれが縄文人。

農業に頼ると飢饉が生まれるが、天候不順で食糧が獲れなくても、別の食料を探せば良かった採取・狩猟生活。だから縄文時代には飢えや貧困が無かった。こだわり

縄文人の精神の根底には、自然界の万物に「カミ」の存在を認める「アニミズム」があった。そのための道具が土偶であり、国宝の「中空土偶」を筆頭に縄文人の豊かな芸術性を我々に伝えてくれる。



北海道には、かつて、生命と自然を尊ぶ古代人たちの素晴らしい文化があった。おおよそ一万年も続いた縄文時代である。しかもこの北の大地は国際交流の盛んな、流行最先端の地だった。今回の歴史秘話は、現代人が学べる「縄文時代」がテーマです。

縄文人は材質にもこだわった。ヒスイは日高にもあるのに、わざわざ新潟県糸魚川産のものを使用。また貝殻は地元のホッキガイを使うのではなく、沖縄産なのである。当時のレベルでは入手するのがかなり難しいのに、きっちりと手に入れている。占う力を増幅するために希少財を敢えて集めたようなのだ。

衣服は、樹の皮や草の繊維を編んだもののほか、シカなどの動物の毛皮も防寒用として利用していた。また、耳

飾り・首飾り・ペンダント・腕輪・足輪・ヘアピンなど実に様々なものが見つかっており、細工も精巧で加工技術も相当高レベル。装身具に対する、縄文人の熱心さが窺われる。着飾ることも大変熱心だったのだ。

心

縄文時代の一部の遺跡からは、多くの副葬品とともに丁寧に埋葬された人骨が、また、貝塚からは動物の骨や石器・土器などの道具が多数発見されて

いる。

貝塚は単なるゴミ捨て場ではなく、魂の再生を期待して「カミ」に返す「送り」の場であった。約六千五百年前の遺跡からは、幼児の足型をつけた土版も見つかっている。不幸にして亡くなった子どもの形見として作られたものと考えられ、今と変わらぬ子どもへの愛情を感じさせる。

交流・交易

北海道と本州の間には津軽海峡があ

る。しかし、縄文時代を通して、本州との交流や文化がこの海峡のために分断される事はなかった。むしろ、海として積極的に利用していた。

北海道・北東北地方の縄文遺跡から発見された土器には、極めて高い類似性が見られる。特異なのはアスファルト。石鏃を固定したり、割れた土器を修復したりするときの接着剤に使われていた。当時は自然に湧出する天然アスファルトで、その産地は秋田県から新潟県にいたる日本海沿岸地方の石油鉱床地帯が中心だった。成分分析から道内の遺跡で見つかったアスファルトにも秋田県産のものがあることがわかっている。交流も盛んだったのだ。

縄文の思想

このように、かつて原始的で遅れた社会と言われた縄文時代が、実は精神的に豊かな社会であったことが次第に分かってきた。感受性が豊かで芸術家だった縄文人。「取れるだけ取る」という欲望をコントロールし、「次のために残す」ことを重んじる。「機能性」「合理性」より「精神的な豊かさ」や「芸術性」を望んだ。縄文人が生んだ土偶や土器にそのことが表れている。闘いや争いの形跡が無い縄文人。支配・被支配の階級も無かった。ゆえに文字すら不要だった。

一万年もの長きにわたって続いた縄文文化。我々現代に生きる者は、自然と共生する彼らの思想に学ぶことが必要なのかもしれない。

小さい頃

私は、建物を描くよりも、自然のものが、特に山の絵を描くのがすごく好きなんです。それはもしかしたら、小さいころの生活が根底にあるのかもしれないですね。

物心がついた頃から絵を描いていましたね。父の仕事の関係で、新冠町字岩清水というすごい山奥で育ったんです。水力発電のダムがある所に隔離されたように住んでいました。朝、家の中にアオダイショウが入ってきたり、

中井 令

なかい れい
一九六七年北海道生まれ。大学卒業後、大手コンピュータ企業に就職するが三十歳の誕生日を期に退職。その後、フリーのイラストレーターとして札幌の広告及び雑誌業界を中心に活動中。

「必要なのは『心の才能』が座右の銘。」

ドアを開けたら近くにクマの足跡があったり、雨が降ればフキの葉っぱを傘にしたり、橋は吊り橋だったり、そんな所です。何かして遊ぼうと思っても、色鉛筆やクレヨンで絵を描くくらいしかなかった。外で遊び回っていたので、色はまっ黒、野生児ですよ。

社が大き過ぎて、自分の役目がよく分からなくなりました。歯車みたいな感じで自分のアイデンティティーが一切感じられなくなりました。完全に会社人間になっていました。「自分というものが全然分からなくなったまま三十歳になってもいいのかな」と、とても悩んだんですよ。でもすごく忙しいから、寝ても覚めても仕事のことしか頭にないんですよ。

転機

ある時、一つのプロジェクトが終わってボカッと暇になったんですが、自分の好きな色が分からない。昔お花が大好きで、いつも部屋の中に飾っていたのに、好きな花が何だったか思い出

せない。暇になったけど、何をしたいのかが分からない。趣味が無いみたいな感じ。これはマズイと思った時に、本屋さんで見つけたのが、『イラストレーション』や『デザインの現場』という雑誌で、それを見た時に、「私さういえば絵を描くのが好きだったんだ」と思い出したんです。絵って趣味で描くものだし、かといってなかったんですが、実は仕事にもできるんだというところに、初めて気づいたんです。

私って、そんなに好きじゃないことでも、毎日毎日十二時過ぎまで仕事をして、これだけエネルギーに頑張っている。「今の自分の体力・氣力を好きになことに向けたら、もっと頑張れるかもしれない」と思ったんです。

その時二十九歳という年齢でしたが、七十歳代まで生きるとして、自分の一生を二十四時間に例えたら、私は今何時何分なのかなと考えた。そうすると、まだ午前九時とか十時なんです。九時とか十時って、慌てて出勤して会社につき、コーヒーを飲んで、「よし！これから今日一日頑張ろう」とって思える時間なんですよ。だから二十九歳っていうのは、どんな可能性も考えられる年齢なんだからその時に気がついた。

それで、三十歳の誕生日に第二の人生のスタートをすべきだと決意して、会社から辞表を出しました。それが新たなスタートでした。

絵本

私は、マールがすごくかわいくって、

かわいくって、自分の子供みたいに思えるんですよ。とにかくいいわいいと思えるようにマールを描いているし、シンプルなんだけど奥深い感じで表現したい。その点にすごくこだわっています。ぐちゃぐちゃといっぱい描くよりは、ものすごくシンプルな絵の中で、悲しき・嬉しきの表情を伝えていきたい。

絵本と他のイラストを描くのはどちらも大好きですが、広告関係の仕事は一発芸みたいな所がちょっとありますよね。ワーワーって感じた旬の瞬間に、いいものを手力で出さうという魅力。マールのような絵本は、長く愛されたいという部分にこだわって、先を考えながら描いている。そこがちょっと違うかもしれないですね。

絵本を創り始めて、なんて絵本って楽しいんだろって思いました。ポスターを創るのはもちろん大好きなんですけど、ポスターって剥がされちゃうんですよ。だけど絵本はずっと形になって残っているから、とても嬉しい。だから絵本をもっとたくさん創っていききたいと思っています。五十歳までに二十五冊ぐらいは出したいですね。

特別展示「おぼけのマールとちいさなびじゅつかん」

昨年十二月出版の「おぼけのマール」シリーズ第四弾の舞台となった三好好太郎美術館で、絵本の原画展が開催されます。原画の他、作中に登場した三好好太郎の作品もご覧いただくことができます。

会期 1月23日(金)〜3月27日(金)
会場 北海道立三好好太郎美術館
(札幌市中央区北二条西十五丁目)



中井 令さん

Dilettante 悠々人語録

札幌を舞台に心温まるタッチで子どもに人気の絵本、「おぼけのマール」シリーズ。その作者がイラストレーターの中井令さん。30歳の誕生日を前に、パソコンの世界からイラストの世界へと転身した、中井さんの悠々人語録です。

MY OLDIES

本の綴じ

紙に書かれたものは綴じてはじめて本になる。本づくりの歴史は綴じの歴史でもある。

製本の起源としては、中国から伝承した「卷子本」が、日本で始めての書物といわれています。

その後、横に長くつなぎ合わせた紙を折りたたむようにした「折り本」が使われるようになり、続いて「和綴じ本」の出現となります。

「和綴じ本」の起源は千年以上も遡り、平安時代の初めは二つ折りした本文をたばねて糊付けし、最後に表紙を糊で接着したものでした。これを発展させたのが「大和綴じ」で、糊を用いず糸でかがって、表紙の二ヶ所をひもで結ぶ形式です。江戸時代に入って木版印刷による出版ブームが起った時、江戸職人の技と粋が和装本に集約されて、様々な綴じ方が生み出されました。

洋式製本が伝わったのは、明治初期に印刷局（現在の大蔵省印刷局）に雇用されたイギリス人が伝授した

のが始まりで、明治六年頃には初めて民間の製本所が開設されました。

当時は製本機械がほとんどなかった時代で、従事する一人ひとりが手包丁や目打ちなどの製本小道具を使って、一冊ずつ本を仕上げていました。

北海道での専業の製本会社の創業は明治四十五年。当時は官庁で使う帳簿類の洋式帳簿製本が中心でした。

保存する帳簿類は大変重要視され、革張り・金文字の立派な装丁でした。

昭和二十二年、北海道の製本業界に大きな転機が訪れました。太平洋戦争により、東京の印刷・製本業界が壊滅状態となり、大手出版会社が疎開先として北海道を選択したので

す。この「出版ブーム」に印刷業界はもとより、製本業界も大変な活況を呈したものです。この「出版ブーム」は、北海道の製本職人たちに多くの知識や技術を普及させ、次の世

代に受け継がれてきました。

現在は製本も自動化が進み、並製本のフルオートメーション化をはじめ、上製本もライン化されて生産能力が一段と増強され、今日に至っています。

十年前に経験した製本に纏わる事件は、今でも私の心に残っています。ある新聞で『北海道の美術書 もう一息だ』というコラムを目にしました。私が担当した図録の製本仕上がりに対しての指摘でした。

「高級感の出る厚表紙仕立てだが、本文をじっくり眺め、読むには表紙に溝がないため、開けにくい。無理に開けようとすると本が悲鳴を上げる」。表紙が反り返り、開くと見返しがバリバリと剥がれる。冷や汗をかきながら、しどろもどろの私に「どっという形でも、話題になることはありがたいことです」と担当学芸員の温かなお言葉。その後、多くの製本知識を習得し、製本の仕上がり

に拘り続けてきました。コラムの結びには「美術書としての内容も印刷も装丁も質感もいだけに、惜しまれる。北海道で作られる美術書、もう一息で一級品になれる」とエールが送られていました。

(K)

BOOK INFORMATION

ちょっと気になる一冊 受書紹介

毎月「新聞」

佐藤雅彦 著

毎日新聞社刊

定価一、三〇〇円(税別)

二〇〇三年

三月十五日発行



学生時代に「〇〇じゃないですか」という言葉使いをして、教授に叱られた経験がある。最近ではテレビでも日常的に使われているので、何故この言葉を使って叱られたのか当時

はよくわかっていなかった。コラム形式で始まるこの本の、はじめのテーマは「じゃないですか禁止令」。ある時期から急に使われた「じゃないですか」という言葉。これを著者が初めて体験した時の強

烈なインパクトを語っている。著者は、言葉の裏に隠された意図やずるさ、押しつけがましき、この言葉の

及ぼす影響力、不安を、明確かつ論理的に書いている。このコラムを読んで自分が叱られた理由がようやく

すっきりと解決した。では、言葉使いの本なのかというところという訳ではない。出勤時に靴ひもを結んでから部屋の中の忘れ物に気づいた時の「どっにか靴を脱がないで忘れ物をとりに行きたい」と

(S・K)

円山動物園 スノーフェスティバル

2009



なぜ動物園で雪まつりなの？

いつも楽しい心のふるさとー札幌円山動物園で、今年もスノーフェスティバルが開催される。今年で三回目を迎え、年を重ねるごとに魅力を増しているこのイベントだが、円山動物園で行われるようになった経緯は、意外と知られていないのではないだろうか。

二〇〇五年、自衛隊の規模縮小に伴って、さっぽろ雪まつりの真駒内での開催が終了した。一九六五年に第二会場として正式に設置され、七二年の冬季オリンピックを経て、雪まつりを世界に通じるイベントに成長させた会場の閉鎖だった。「子どもたちに大人気だった、あの巨大な氷の滑り台もなくなってしまっ。子

どもたちをがっかりさせたくない」「地下鉄から歩いていける会場で、子どもが楽しめる雪まつりの新たな伝統を作りたい」「ならば円山動物園に氷の滑り台を」と、動物園のスタッフ、市民、ボランティアや町内会、一部の有志企業が集まり、実行委員会を設置。そうして開催されたのが、この『円山動物園スノーフェスティバル』だった。

長さ二十メートルの氷の滑り台

昨年は「北海道子連れプロジェクト」の協力で「氷のグラスづくり体験」が行われ、透明な氷の器に光が差し込み、輝く様子が多くの人々の目を惹きました。また、園内の通路には、市民やボランティアが製作した総勢五十体の雪だるまが並び、人々をお出迎え。メルヘンチックな演出に、来園者は子どものみならず大人も心を躍らせた。

だが、今年も目玉となるのはやはり、第一回から受け継がれている、二十メートルの長さの氷の滑り台だろう。滑り台は今年、十五メートル、十メートルと合わせて三基設置される。他にも、道内最大級の敷地面積を誇る円山動物園の中を、チューブスライダーで風を切って滑走する企画が予定されている。

この滑り台が好評なのは、長さだけが理由ではない。会場が動物園という、たくさんの方が見守る場所のため、滑り台を待つ長蛇の列ができないのだ。何時間も並んで滑るのは一瞬、などということはない。

冬の動物園には発見がある

そして忘れてはならないのが、ここが動物園であるということだ。ちょうどこの時期には、冬にしか見られない動物の生態を観察することができる。

もともと寒冷地に生息しているトドやアザラシは動きが活発になり、夏には見られなかった、本来の姿を来園者に披露してくれる。降りしきる雪の中にたえずむききゅうの毛並みは、まるで無風状態に舞う細氷のような輝きだ。オオカミもこの時期は冬毛に生え替わり、夏とは趣きを変えている。

園内を歩けば、その他にも冬ならではの発見がたくさんあるはずだ。冬の動物園を訪れることは、動物たちの新たな面を見つめる貴重なチャンスでもある。

「コモドドラゴン」の展示も

また、一月十一日から二月二十二日までの毎週日曜日には、「サンデーセミナー」が行われ、動物の生態や行動の特徴など、普段はなかなか聞くことができない話を、飼育員からじかに聞き学ぶことができる。さらに現在、円山動物園ではインドネシアで「宝の動物」と称される世界最大級のトカゲ、「コモドオオトカゲ（コモドドラゴン）」を期間限定で特別に展示



している。このトカゲは、今の日本の動物園では円山動物園でしか見る事ができない、とても希少な生き物だ。

北海道の新しい文化に

北海道では昔から、冬でも外に出て雪の中で遊ぶ文化が育まれていた。だが最近では、雪まつり会場には観光客ばかりが目立ち、公園で雪遊びをする子どもの姿も、あまり目にしなくなっている。

雪と触れ合い、大いに遊び、さらに環境問題や生物の多様性を学ぶ――スノーフェスティバルを通じ、円山動物園はそんな場を提供している。このイベントが長く続き、北海道の文化となっていくことを願って止まない。(Y・K)

* * *

円山動物園 スノーフェスティバル2009

開催期間

2009年2月2日(月)～2月11日(水)

開場時間 9時30分～16時30分

会場

さっぽろ円山動物園
札幌市中央区宮ヶ丘3番地1
(地下鉄円山公園駅3番出口
から徒歩15分)

《お問い合わせ》

☎ (011) 621-1426



■編集部から「あなたの素晴らしい創造力を讃えて」昨年12月第2回道展 U21入賞者に贈られた言葉です。前回より217点多い688点の応募があり、芸術授業が削減され芸術教育が軽視されている中で、多くの若者が公募展でチャレンジをしているのは喜ばしいことです。若者の創造力の欠如が問われています。幼年から芸術・文化に触れ、読書の習慣を身に付けることで創造力は養われます。『おぼけのマルとびじゅつかん』は子どもたちに「美術館で絵を見る楽しさを知ってほしい」との想いで上梓しました。(K)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://owl-online.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二

●発行日／2009年1月5日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス！